

新型コロナウイルス感染症拡大前後の実習室自己学習支援

— 8年間の実習室アンケート結果を通して—

緒方 優^{1)*} 賀数 勝太¹⁾ 榎 美樹¹⁾ 佐居 由美¹⁾ 中田 諭¹⁾
 松本 文奈¹⁾ 五十嵐由美子¹⁾ 大原まどか²⁾ 森島久美子³⁾

Training room self-learning support before and after COVID-19 —Through the 8-year laboratory survey results—

Yu OGATA^{1)*} Shota KAKAZU¹⁾ Miki SAKAKI¹⁾ Yumi SAKYO¹⁾ Satoshi NAKATA¹⁾
 Ayana MATSUMOTO¹⁾ Yumiko IGARASHI¹⁾ Madoka OHARA²⁾ Kumiko MORISHIMA³⁾

[Abstract]

Since 2014, when a full-time laboratory assistant was assigned at St. Luke's International University School of Nursing, a questionnaire has been conducted annually with the aim of improving the laboratory environment. The results obtained from the questionnaire for the improvement of the training room environment are utilized for its management from the following year onwards. Due to the impact of the new Coronavirus infection in 2020, the operation of the training room differed from before the spread of the infection, and students using it were forced to limit their practice time. This year marks the third year that the practice room has been operated in a new style, with designated self-study days. We focused on three constant questions that had been asked since before the spread of the infectious disease: "Frequency of use of the training room", "Satisfaction with the support provided by the training room assistant and its reasons", and "Satisfaction with self-learning in the training room". A comparison was done before and after the spread of the infection. The results did not decrease significantly before and after the spread of COVID-19 in all three question items. Regarding 'satisfaction with the support provided by the laboratory assistants' and 'satisfaction with self-learning in the laboratory', changes did not occur in the operation of the laboratory due to the spread of the infectious disease, and there was an increase in satisfaction levels in each question. This is probably because the practice time and the fixed number of students created an environment where it was easy for students to ask questions, which led to an increase in satisfaction.

[Key words] COVID-19, Self-Learning, Laboratory Assistant, Nursing Students

[要旨]

聖路加国際大学看護学部では、2014年に専任の実習室助手を配置して以降、実習室環境改善を目的としたアンケートを毎年実施している。実習室環境改善のためのアンケートで得られた結果は、次年度以降の実習室運営に活用している。2020年の新型コロナウイルス感染症の影響を受け、実習室運営も感染症拡大前と大きく異なり、実習室を利用する学生は練習時間の制限を余儀なくされた。指定の自己学習

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・Graduate School of Nursing Science, St. Luke's International University

2) 聖路加国際大学物品管理課・Goods Management Division, St. Luke's International University

3) 聖路加国際大学財務経理課・Finance and Accounting Division, St. Luke's International University

*Corresponding author.

日を設けた新しいスタイルでの実習室運営は今年で3年目となり、今回過去8年間のアンケート結果をもとに感染症拡大前後の比較を実施した。感染症拡大前から継続している「実習室の利用頻度」、「実習室助手による支援の満足度とその理由」、「実習室での自己学習の満足度」の3つの質問項目に焦点を当て、感染症拡大前後で比較を行った。3つの質問項目全てにおいて、感染症拡大前後で結果が大きく減少することはなかった。「実習室助手による支援の満足度」と「実習室での自己学習の満足度」については、感染症拡大による実習室運営の変更に影響を受けることもなく、それぞれに満足度の上昇が見られた。これは、練習時間や定員が定められたことで、学生にとっては質問しやすい環境が作られ、満足度の上昇につながったことが考えられる。

〔キーワード〕 新型コロナウイルス感染症, 自己学習, 実習室助手, 看護学生

I. はじめに

昨今の在院日数の短縮化や医療安全が重視されるようになったことで、看護学生の臨地実習での経験は限られたものとなった。さらに、そこに追い打ちをかけるように、2020年に新型コロナウイルス感染症の蔓延が重なったことで、看護学生の臨時実習時間や経験数はより貴重なものとなっている。

この状況は、看護学生にとって危機的状況とも捉えられ、コロナ禍で看護学生となった学生にとって、学内での看護技術練習や演習は、これまで以上に重要な役割を担っているといっても過言ではない。

聖路加国際大学（以下、本学）では2014年に専任の実習室助手を配置して、今年で9年目となる。実習室助手は、学部生の自己学習支援を強化するため、¹⁾ 実習室に常駐し、看護学生の自己学習支援を行っている。看護学生が看護師の基礎を構築する上で、必要な基礎看護技術を身に付けるために行う実習室での自己学習は貴重な時間といえる。薄井らの研究によると、技術の修得過程には「知る段階」「身につける段階」「使う段階」があり、「知る段階」では看護技術の目的を意識しながらその根拠を掴むこと、また、「身につける段階」では、ポイントを正確に繰り返すことの重要性²⁾について述べられている。看護学生が看護技術を身に付けるために繰り返し練習をすることは、技術の修得過程において大事な段階の一つであるということが出来る。その大事な段階を支援する上で、実習室での自己学習環境を整えることは重要な役割を担っている。

本学では、常勤の実習室助手を配置して以降、実習室改善のためのアンケートとして、実習室を利用する本学の学部生を対象としたアンケートを実施し、結果をもとに次年度以降の実習室運営に反映させている。

II. 目的

今回は、これまで8年間（2020年はコロナ禍により未

実施）に実施した実習室アンケートの内容や結果の確認を行い、結果をもとに比較を行うことで、より効果的な結果を得るためのアンケート内容の検討を目的とした。

III. 過去8年間の自己学習の実施方法

新型コロナウイルス感染症拡大前は、実習室を終日開放することで、学生は自分の空き時間や放課後に実習室を利用し、看護技術習得のための自己学習を行っていた。³⁾そのため、学生は自己学習時間を各自でスケジュールすることができ、学生自身の裁量で実習室を利用しやすい環境であったと推察される。しかしながら、2020年に新型コロナウイルス感染症が拡大したことで、密を避けた環境が求められるようになり、実習室の終日開放も難しい状況となった。感染症拡大前と同様の実習室運営は困難であることから、2020年以降は定員を定めた実習室運営に切り替え、学生は実習室での自己学習時間を制限されることとなった。

2020年以降は、基礎看護技術を学ぶ学部2年生100名が自己学習時間を確保できるよう、学生1名につき1週間に1コマ（90分）の自己学習指定日を設けた。これ以外にも、様々な学年が実習室を利用できるよう、平日は自己学習フリー日を1週間に4～6コマ分、土曜日は月に1～2回開設した。

IV. 実習室アンケート

本学では、毎年前期（5月～7月頃）の期間に、実習室の利用に関する環境改善を目的とした“実習室改善のためのアンケート”を実施している。実習室を利用する学部生460名を対象とし、各学年の意見を取り入れている。アンケート開始当初はアンケート用紙とwebアンケートを併用していたが、コロナ禍以降はwebアンケートのみの実施としている。アンケートに関して、質問数は35問前後としており、実施年度に応じて、質問数や質問内容の修正、追加を行っている。しかしながら、「利

用頻度]、「実習室の練習環境」,「実習室助手による支援の満足度とその理由」,「実習室での自己学習の満足度」,「実習室の学修環境に関する満足度」の質問項目に関しては、毎年調査を行っている。

尚、本アンケートの回答は自由意志とし、無記名で、個人が特定されないこと、また、結果を公表する旨を提示し、同意を得た。聖路加国際大学事務部教務・学生課に調査実施届を提出し承認を得て実施している。

V. 実習室改善のためのアンケート結果

今回は、毎年質問している5つの質問項目の中から、実習室運営の変更に伴い、変化が大きく表れると思われる「利用頻度」,「実習室助手による支援の満足度とその理由」,「実習室での自己学習の満足度とその理由」の3つの質問とアンケート回収率に焦点を当て、過去8年間の経過と新型コロナウイルス感染症拡大前後の比較を行った。

1. アンケート回収率

2014年から開始された過去8年間のアンケート平均回収率は49%であった。コロナ禍以前は回答用紙とwebアンケートの2つの手段を活用し、アンケート開始年度である2014年が26%、2015年が54%、2016年が59%と年々回収率は上昇し、平均回収率は56%であった。コロナ禍以降の2年間はwebアンケートのみとしており、2021年が26%、2022年が35%に留まり、平均回収率は31%と感染拡大前に比べ大きく減少したことが明らかとなった。

回答者の内訳としては、例年、実習室利用頻度の高い学部2年生の回答率が全体の半数近くを占めている。学年が上がるに連れて、実習室の利用頻度が減少すること

に比例し、学部4年生については、全体の4%前後の回答率となっている。また、実習室利用頻度の低い学年については、アンケートの回答内容の多くが「利用していない」の回答であった。

2. 実習室の利用頻度

「1番多く利用した時期に、実習室を自己学習のために、どのくらいの頻度で利用しましたか」という質問に対し、5択（毎日、2～3日に一度、1週間に一度、ほとんどしていない、学習していない）より回答を求めた。分析は、2018年度以前と選択肢の区分を合わせるために、“ほとんどしていない”、“学習していない”を“それ以下”の4択として行った。過去8年間の結果より、全体の42%の学生が「2～3日に一度」と回答していた。コロナ禍前の平均は、「2～3日に一度」の回答が41%、「毎日」の回答が20%、「1週間に一度」の回答が17%、「それ以下」の回答が22%であり、年度による大きな変化は見られなかった。コロナ禍以降は、「2～3日に一度」の回答が44%、「1週間に一度」の回答が17%、「毎日」の回答が11%、「それ以下」の回答が32%であった。

感染症拡大前後で、学生の利用頻度が大きく変化することはなかったが、毎日実習室を利用する学生が約10%減少していることが明らかとなった。(図1参照)

3. 実習室助手による支援の満足度とその理由

「実習室助手による支援は行き届いていたと感じますか」という5択の質問に対し、コロナ禍前は、「そう思う」の回答が47%、「ややそう思う」の回答が39%、「あまり思わない」の回答が7%、「思わない」の回答が2%、「実習室を利用していない」が10%であり、年度毎の大きな変化は見られなかった。コロナ禍以降は、「そう思う」の回答が84%、「ややそう思う」の回答が12%、「あまり

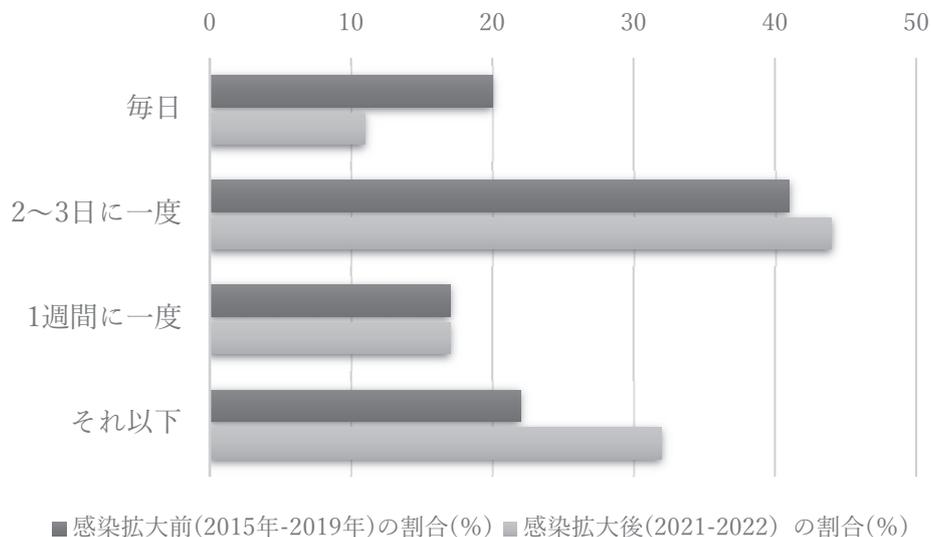


図1：感染拡大前後の実習室利用頻度比較

「思わない」の回答が1%、「思わない」の回答が1%、「実習室を利用していない」が2%であった。

感染症拡大前後で、実習室助手による支援が行き届いていたと感じた回答者の割合は約30%上昇していることが明らかとなった。

また、実習室助手による支援が行き届いていたと感じた理由については、感染症拡大前後問わず、「分からないことを丁寧に教えてくれる」、「質問しやすい環境がある」、「巡回してくれる」といった回答が多く見られた。反対に、実習室助手による支援が行き届いていないと感じた理由について、感染症拡大前は、「利用者が多い時間帯は実習室支援員に質問したくてもできなかった」、「実習室助手が不在だった」という回答が全体の半数以上であったことに対し、感染症拡大後は「実習室助手と関わる機会がなかった」との回答のみであった。

(図2参照)

4. 実習室での自己学習の満足度とその理由

「実習室での自己学習は満足にできましたか」という質問に対し、全く満足ではないを「1」、とても満足しているを「10」として、10段階評価を行った。

コロナ禍前は、「10」の回答が17%であったのに対し、コロナ禍以降は31%に上昇していた。概ね満足とされる「8～10」の回答割合は、コロナ禍前が62%であり、コロナ禍以降が78%であったことから、全体的にコロナ禍以降に満足度が上昇していることも明らかとなった。

実習室での自己学習に対する満足度に関して自由記述にて理由を問うたところ、「実習室助手の対応」や「実習室の利用状況」に関する回答が多く得られた。(図3参照)

VI. 考察

新型コロナウイルス感染症拡大前後で、実習室の利用方法が大きく変化したことにより、利用者の学生に何かしらの影響を及ぼしたと予測したことから、今回感染症拡大前後で過去8年間の実習室アンケート結果より比較を行った。

1. アンケート回収率

感染症拡大前後でアンケート回収率が約20%も減少していることから、アンケートの実施方法の検討が必要であると考えられる。感染症拡大前に実施していたアンケート用紙とwebを用いた2通りの実施方法を含めた検討が求められる。また、アンケート回答者の内訳やアンケート回答内容より、対象者を実習室利用頻度の高い学年に限定することや各学年に応じたアンケート作成の検討を行う必要があると考える。

利用頻度の高い学年に焦点を当てることで、より詳細な回答が得られ、次年度以降の実習室運営に反映しやすくなると考える。

2. 実習室の利用頻度

実習室を自由に利用することのできた感染拡大前と比較して、感染拡大後は学部2年生であれば1週間に自己学習指定日1コマと自己学習フリー日4～6コマの練習時間に制限されることとなった。

利用頻度を比較すると、「毎日」利用すると回答した学生が約10%減少したことは、自己学習時間の制限が関係していると考えられる。しかしながら、感染拡大前から最も多く利用されていた「2～3日に一度」の割合はやや上昇し、学生の利用頻度が急激に減少することはなかったと考える。その理由として、学生の自己学習時間

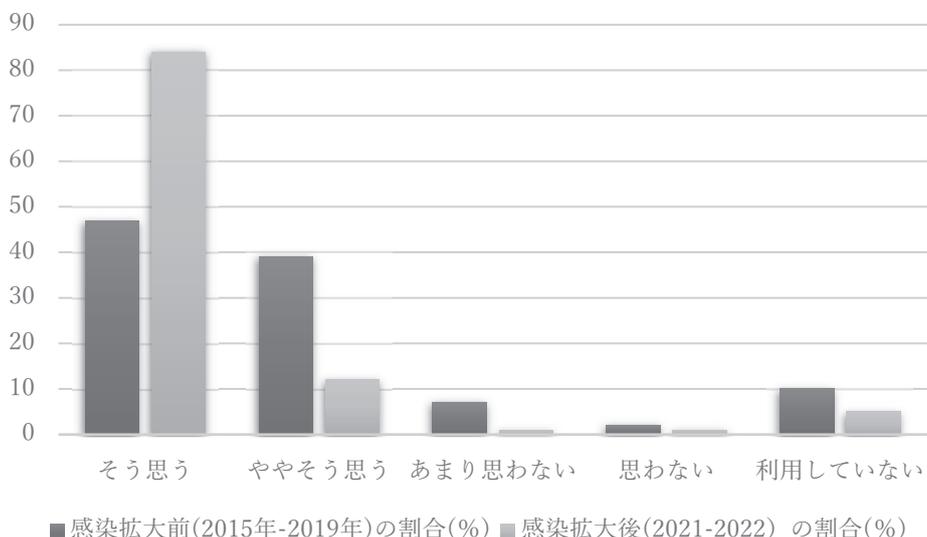


図2：感染拡大前後の実習室助手による支援の満足度比較

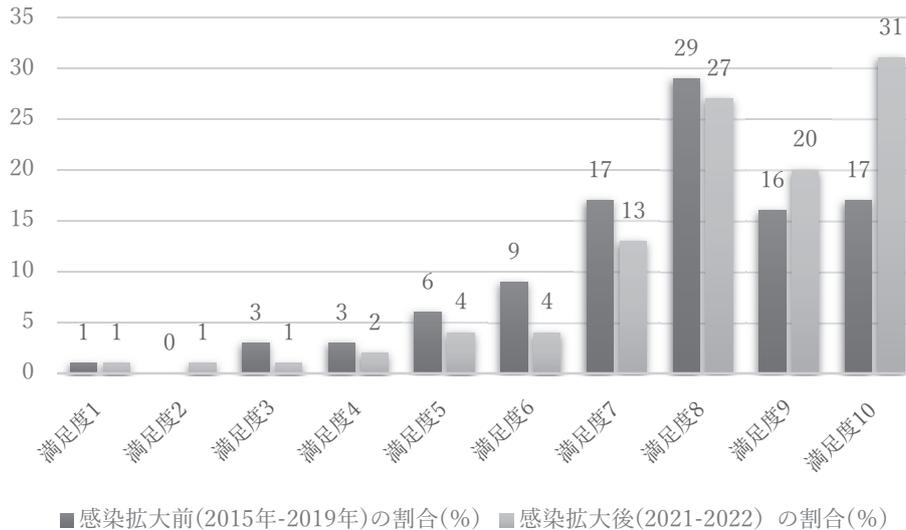


図3：感染拡大前後の自己学習満足度比較

を指定する際、各学年の空き時間や必修科目の間の時間などから希望日を募り、学生の需要を鑑みた自己学習日の選定を行ったことに効果があったのではないかと考える。学生が利用したいと思うときにいつでも利用できる環境が理想的ではあるが、人的資源にも限界があるため、学生の需要を汲み取り、限られた時間の中でいかに学生の利用頻度を維持していくかという点に焦点を当て、今後も自己学習会設日を検討していく必要があると考える。

3. 実習室助手による支援の満足度とその理由

実習室助手による支援については、年々上昇しており、感染拡大による実習室運営の変更が影響することはなかった。実習室助手による支援が行き届いているという回答割合は、感染拡大前後で約30%も上昇していたことから、自己学習時間の制限と実習室助手による支援の満足度は比例しないことも明らかとなった。

実習室助手による支援が行き届いていないと感じた理由に関する自由記述の回答に、感染症拡大前後で大きな変化が見られたことから、自己学習日を指定して、実習室助手が必ず常駐している環境は、自己学習を行う学生にとって効果的な自己学習に繋がっていることが考えられる。実習室の利用者を制限することで、利用者の学生にとっては実習室助手に質問しやすい環境があり、また実習室助手にとっては学生数が限られているため、学生一人ひとりに時間をかけて接することができるという、互いにとってより良い環境が作られていることが明らかとなった。

自己学習時間を制限することが必ずしも学生にとって不利になるということではなく、少人数制ならではの効果があるのではないかと考える。

4. 実習室での自己学習の満足度とその理由

実習室での自己学習の満足度については、年々上昇の傾向にあり、感染拡大による実習室運営の変更の影響を受けることなく、感染拡大後も高い満足度を維持できていることが明らかとなった。特に、とても満足しているに値する「10」の回答割合が、感染拡大後に2倍近く上昇していることも明らかとなったことから、自己学習時間の制限が学生にとって良い効果をもたらしている可能性があるのではないかと考える。

VII. 結論

感染拡大前の自由にいつでも学生が実習室に来て、自己学習できる環境から、自己学習時間を指定され限られた時間の中で練習を行う環境の変化は、学生にとってマイナスイメージとなることが予測された。

しかしながら、実際にはアンケート結果に大きな変化はなく、質問項目によっては感染拡大前の結果より良い結果になっている回答も見受けられた。

学生の自己学習時間を制限することが必ずしも学生にとって悪影響を及ぼすとは限らないということが明らかとなった。また、時間制限することが実習室の混雑解消につながり、利用者一人ひとりの満足度向上につながっているということも考えられる。

VIII. 今後の課題

今回の調査では、感染拡大前後における学生の満足度に関して明らかとなったが、実際に自己学習時間が制限された環境で学習した学生の看護技術の習得状況は明らかにできていない。今後は、学生の看護技術習得状況を含めたアンケート内容の修正も検討していきたい。こ

これらの調査結果を明らかにすることは、自己学習の効果や専任の実習室助手を配置する意義に繋がると考える。

引用文献：

1) 荒木麻奈美, 佐居由美, 中田諭ほか. 看護実習室における実習室助手の支援の現状. 聖路加国際大学紀要.

2019:6:103-6.

2) 薄井坦子, 小玉香津子, 三瓶真貴子ほか. 基礎看護技術. 医学書院; 2003. p. 13-15.

3) 緒方優, 榊美樹, 賀数勝太ほか. コロナ禍における看護実習室の自己学習支援の在り方. 聖路加国際大学紀要. 2022:8:162-165.